

平成 27 年度 丹後織物業の景況・動向調査

調査対象	丹後地区内の織物事業者：188 事業者（「丹後織物工業組合」に加入する親機事業者）	
調査期間	平成 27 年 12 月～平成 28 年 2 月	
調査方法	アンケート調査	郵送：188 事業者 回答：82 事業者(回答率:43.6%) ※前年度回答率:41.9%
	聞き取り調査	訪問：9 事業者（白生地 6、帯地 2、その他 1）
回答者の概要	市町別	*京丹後市:51% *与謝野町:46% *宮津市:3%
	従事者数	*1～4 人:54% *5～9 人:31% *10～19 人:12% *20 人以上:3%
	年代構成	*30 歳代以下:15% *40～50 歳代:37% *60 歳代:33% *70 歳以上:15%
	生産形態	*内機・外機ともあり:41% *内機のみ:31% *外機のみ:28%
生産品目	*白生地:49% *帯地:30% *その他(服地・小物・その他):21%	

[平成 28 年 2 月 調査：公益財団法人 京都産業 21 北部支援センター]

《はじめに》

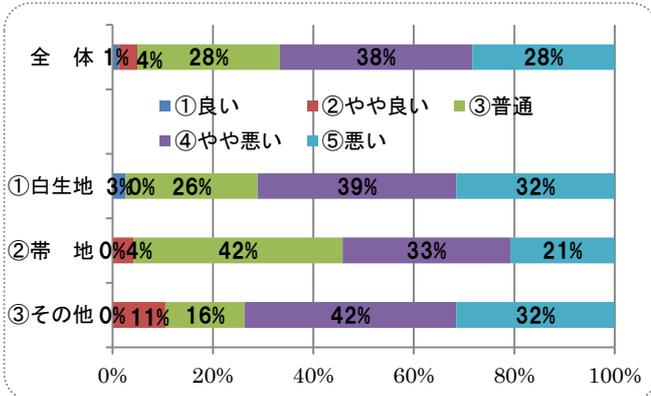
- (公財)京都産業 21 北部支援センターでは、丹後地域織物業の景況や動向等を把握するため、平成 27 年 12 月から平成 28 年 2 月にかけて「アンケート調査」と「聞き取り調査」を行いました。
- 昨秋の室町・西陣訪問調査では「初めて経験する厳しさ」とまで語られましたが、丹後地区の「アンケート調査」においても大変厳しい状況が浮き彫りになりました。一方、若手事業者を中心に訪問した「聞き取り調査」では、日本・世界のシルク産地の担い手として頑張っている状況を聞かせていただきました。
- 今回の調査結果は、アンケート回答の計数的分析結果を「第 1 部：アンケート結果」として、活性化取組等の聞き取り結果を「第 2 部：聞きある記」としてまとめました。

《第 1 部：アンケート結果》

I 景況感調査

1 平成 27 年の景況感 =DI 値-61、18PT の下落=

- 平成 27 年の景況感は、全体で「良い」「やや良い」を合わせて 5%（前年比-7PT）と下がる一方で、「やや悪い」「悪い」は 66%（前年比+11PT）にのぼった。その結果、DI 値は-61、前年値より 18PT もの落ち込みとなり、その厳しさが改めて浮き彫りとなった。
- 生産品目別に「良い」「やや良い」「普通」を合わせた比率は、帯地が 46%と最も高く、白生地、その他(服地・小物等)は 30%を割った。



2 平成 28 年の景況見通し =さらに厳しく=

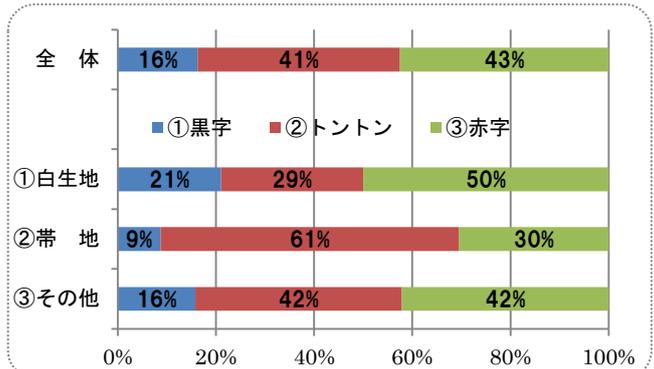
- 全体で、「良いだろう」「やや良いだろう」が 6%（前年比-4PT）、「やや悪いだろう」「悪いだろう」

は 73%（前年比+15PT）と、さらに厳しさが増す見通しとなった。



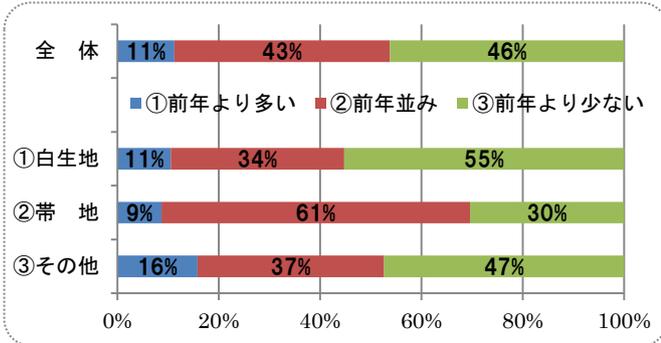
3 平成 27 年の採算状況 =白生地、半数が赤字=

- 採算状況は、全体で「黒字」が 16%（前年比+1PT）、「トントン」が 41%（前年比-9PT）、「赤字」が 43%（前年比+8PT）となり、前年と比べて「黒字」が横ばいの中、「トントン」が大きく減り、「赤字」が大きく増えた。
- 生産品目別に「赤字」の比率をみると、白生地が 50%にのぼり、次いで帯地・42%、その他(服地・小物等)・30%の順となった。



4 平成 27 年の生産・受注 =前年比減が 15PT 増加=

- 生産・受注量は、全体で「前年より多い」が 11% (前年比-3PT)、「前年並み」が 43% (前年比-12PT)、「前年より少ない」が 46% (前年比+15PT)と、ここでも厳しさが表れた。
- こうした中でも、帯地は 61%が「前年並み」を確保し、他の生産部門より減少が少なかった。



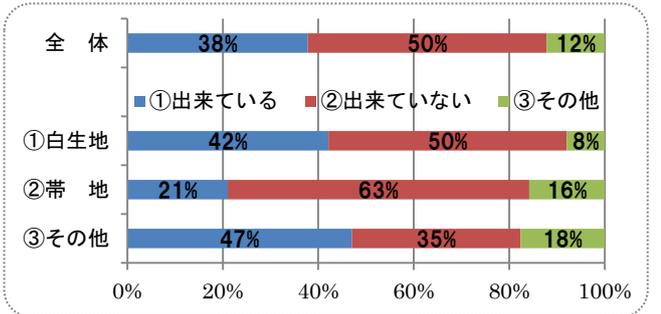
5 平成 28 年の生産・受注見通し =悪化見込 1/2 超=

- 生産・受注見通しについては、「増加するだろう」が 5% (前年比+2PT)にとどまり、「横ばいだろう」が 43% (前年比-19PT)、「減少するだろう」が 53% (前年比+22PT)となり、さらに悪化するとの見通しが半数を超えた。



6 原料高の製品転嫁 =白生地、10PT 超改善=

- 全体では、「出来ている」が 38%(前年比+11PT)、「出来ていない」が 50%(前年比-4PT)と、前年より改善がみられた。中でも、原料高との関わりが深い白生地、その他(服地・小物等)では、前年よりそれぞれ 10PT 以上改善した。



7 平成 27 年の資金繰り =悪化回答 4 割強=

- 資金繰りの「悪化」は 43%にのぼり、前年の 37%から 6PT 増えた。



8 内機内の従業員数 =2/3 が適当=

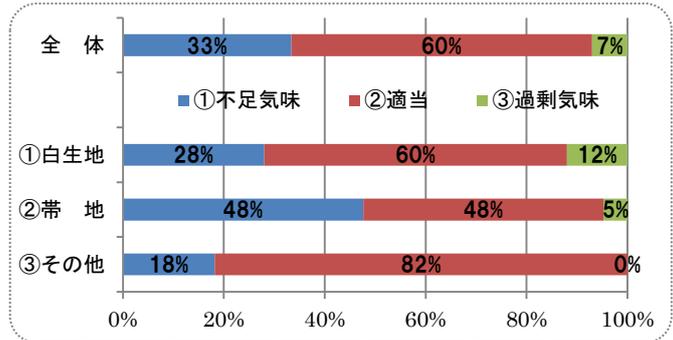
- 全体で「不足気味」26%、「適当」64%、「過剰気味」10%で、前年と大きな差異はなかった。



- ※「不足気味」回答のうち、「新しく確保したい」が 54%、「現状で頑張る」が 38%、「生産を縮小せざるを得ない」は 8%とわずかであった。

9 出機の軒数 =帯地、不足が半数=

- 全体では、「不足気味」が 33%、「適当」が 60%であったが、出機が大きな割合を占める帯地では「不足気味」が 48%にのぼった。



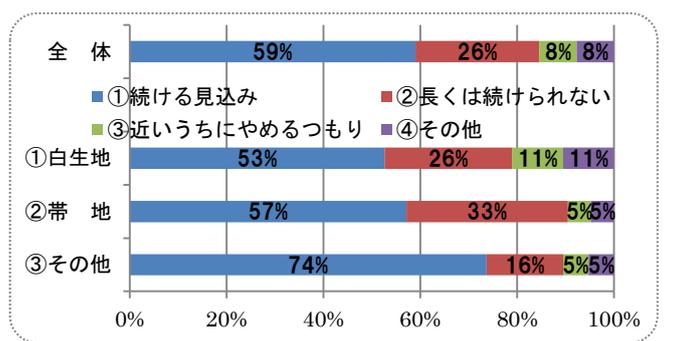
- ※「不足気味」回答のうち、「新しく確保したい」が 47%、「現状で頑張る」が 37%と大半を占めた。

II 活性化調査

1 事業の継続見込み

=「続ける見込み」が 6 割占める=

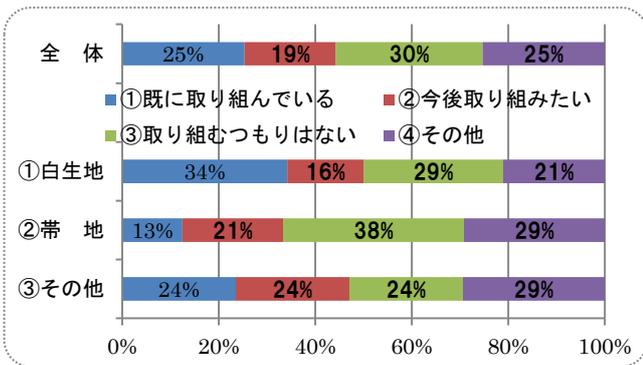
- 全体では、「続ける見込み」が 59%と約 6 割を占めたが、前年比では 6PT 減少した。
- 生産品目別では、その他(服地・小物等)の「続ける見込み」が 74%にのぼったが、ここでも前年比で 9PT 減少した。



2 生産・流通の新規取組

=白生地の 1/3 が既に取組=

- 今回新たに、商品開発や完成品製作、販路開拓などの新しい取組の状況について尋ねた。
- 全体では、「既に取り組んでいる」が 25%、「今後取り組みたい」が 19%と、前向な姿勢が 44%にのぼった。
- その一方で、「取り組むつもりはない」の否定的見解が 30%、「分からない」は 25%であった。
- 生産品目別では、白生地の 34%が「既に取り組んでいる」と答えた。



3 活性化への「6つの考え方」の重要度 =「総合産地化と京都連携のバランス」に 最も高い支持=

- 今回新たに、丹後産地の活性化に向けての「6つの考え方」について、その重要度を「◎、○、△、×」の選択方式で尋ねた。
- また、それぞれの考え方の重要度を「◎：3点」「○：2点」「△：1点」「×：0点」で点数化した比較結果を最後に掲げた。
- その結果、「総合産地化と京都連携のバランス」に最も高い支持があり、次いで「京都（室町・西陣）との連携信頼」、「自社（内機）生産の拡充」の順となった。特に、白生地生産者から、これらに高い支持があった。

①完成品までの一貫生産による総合産地化



②京都（室町・西陣）との連携信頼の維持強化



③総合産地化と京都連携のバランス



④生系の丹後生産によるブランド化等



⑤親機の雇用と自社（内機）生産の拡充

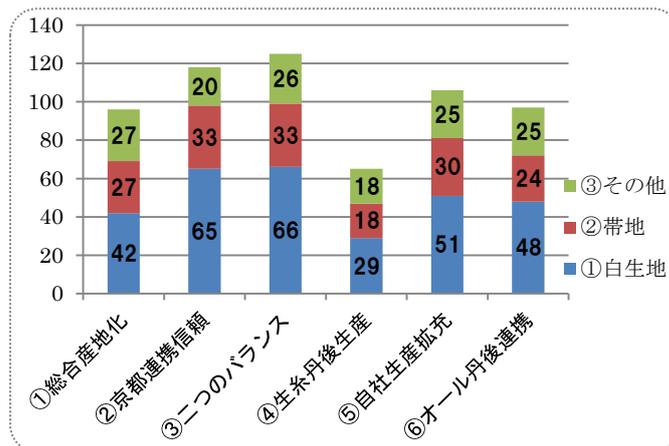


⑥織物事業者がオール丹後で連携



《「考え方」重要度の点数化比較》

[◎3点 ○2点 △1点 ×0点]



《第1部 終》

《第2部：聞きある記》

若手が頑張っている白生地、帯、スカーフ等の親機9社を訪問し、聞き取りを行った。

アンケート結果のとおり、その厳しい現状が語られたが、そうした中でも、それぞれが頑張っている状況やこれからへの思いを聞くことが出来た。

=「得意分野」「特徴」生かして展開=

- 白生地分野では、あくまでも白生地に絞って経営展開しているところ、夏物に特化して取り組んでいるところ、海外（ベトナム）でも生産展開をしているところ、先染完成品にウェイトを置いて展開しだしたところがあった。
- 帯分野では、OEM方式で西陣ブランド商品の生産展開をしているところ、貝の光沢部分や金箔・牛革を用いて「ちりめん+α」の自社ブランド製品をつくっているところがあった。
- 白生地生産からスカーフ・服地・小物品生産に切り替え、直販・ネット通販・観光卸売の展開をしているところもあった。
- このように、丹後全体が同じ生産を繰り返しているはやっていけないという思いから、それぞれが、自分の得意分野や特徴を生かして、よりコンスタントな生産と安定的な経営を目指して取り組んでいる状況を聞いた。

=取引価格「採算性アップ」が必須=

- 共通する取組は、これまでの技術力を生かして、小ロットでオリジナル性、付加価値を重視した商品づくりで取引価格のアップに努めていること。
- 出機の高齢化と減少で重点を内機生産に移行せざるを得ず、コストアップが避けられない中で、技術力向上とより良い製品づくりを通じての信用確保で、こちらの言い値を通していく姿勢。
- OEM方式の中で納品量に関わらない月額固定方式の取引をしているところ、燃糸から行って品質管理を徹底する中で高値取引を維持しているところもあった。

＝新しい取組へ「意欲」と「躊躇」

- 先染完成品づくり等の新しい取組は、より前へ行っている取引ができるため、利益率も高く、今後意欲的に取り組める分野である。
- 丹後のシルク織は世界に通用するブランド。これを生かした海外展開(ヨーロッパ中心)が着実に広がっており、今後もさらに伸ばしていきたい。
- そうした声の一方で、販路の開拓・確保やデザイン力、コンスタントな生産体制の維持、在庫リスクの回避といった面で、全面的な方向転換までは躊躇せざるを得ないといった声も多くあった。

＝取引の原点「信用」かつ「ウィンウィン」＝

- 前述のとおり、少しでも前へ行き利益率を上げていく流れと、これまでの取引を維持する中で引き上げ努力をしていく流れ。この両者の狭間で、丹後産地サイドも、京都流通サイドも、それぞれが選択しあって取引している状況が窺えた。
- 丹後産地の織技術力の蓄積、京都(室町・西陣)の染技術力・集散販売力の蓄積、それぞれの持ち分・得意分野を一つに吸収再編することは困難としても、従来そのままということにはならない。こうした思いは、丹後も京都も同じ感触。
- 取引は、双方の「信用・信頼」と「ウィンウィン」の関係構築を原点として、流れの変化や消費者目線に敏感に反応し、柔軟に対応していくべきもの。こうした考え方のもと、取引の形態に絶対や最終到達点はなく、今後も現状の維持改善と多様な広がり織り交ざって進んでいくように感じた。

＝内機の充実と人材の育成＝

- 出機の高齢化による減少と技術力低下には、歯止めをかけることはできない。このことから、丹後産地の生産量は、今後も確実に減少していく。
- 内機はコストがかかる一方で、スピードとオリジナル性で価格につながる可能性を持っている。今後、織の産地として残っていくためには、親機が可能な限り内機を充実していく必要がある。
- そのためには、機械・設備の導入(メンテ含め)と若手人材の雇用と育成が大きな課題となる。これらに対する関係機関の支援の継続、充実をお願いしたい。また、採用者の技術力養成だけでなく、受入側の育て方や心構えといった研修支援を望むという声を聞いた。

＝「風通し良い」丹後の若手＝

- いま丹後では、40～50歳代の後継者が、それぞれ経営の柱と生産ペースを模索しながら頑張っている。
- そして彼らは、丹後織物工業組合の30歳代以下で構成する「絹友会(きゆうかい)」での活動、完成品づくりの連携グループ「TANGO+ (タンゴ・プラス)」での新たな取組、京都府織物・機械金属振興センターが支援する「丹織技術研究会」での交流等を通じてつながってきた。

- そうしたつながりの中で、「情報や意見、アドバイスの交換」、「声のかけあいや注文の回し合い」など、非常に風通しの良い関係を築いている。またそこには、「自分さえ良ければ」というのではなく、「自分も良く」「みんなも良く」そして「丹後が良く」という共通した思いがあることを全員から聞いた。

＝「品不足感」の訪れはいつか＝

- 着る人や機会は減少一途から持ち直し感がある一方で、丹後の白生地生産は毎年1割減、海外からの輸入ものも減少傾向にある。それでも、供給のタイト感はあるとしても、不足感まではつながらず、小売と買手が強い市場が続いている。
- こうした状況の要因としては、「レンタル増」「合織着物増」「リサイクル着物増」「委託販売・在庫リスクによる作り控え」などが挙げられている。
- 丹後では、今後も確実に出機生産が減少し、団塊世代が出来なくなる頃には更に大きく落ち込むことが見込まれる。
- 今後、供給不足の時代が来るのか、来ないのか、それともそんな単純な問題ではないのか…。

＝丹後の展望「日本・世界のシルク産地」へ＝

- 団塊世代の廃業時を考えると、いま丹後が若い力を蓄えて、全体として力を持つ大きなチャンスを迎えている。
- 技術力と生産基盤に裏打ちされた「丹後ちりめん」の良さは世界一。ヨーロッパなどの海外展開も、大きな可能性を秘めている。
- 白生地、帯、小物、服地、先染完成品など、それぞれがそれぞれの持ち分・得意分野で一定の規模を確保しながら頑張っていく。
- そして、それらが全体でつながり、運命共同体の気持ちを持って「丹後シルク産地」を確固としたものにしていく。
- 40～50歳代の後継者は、最盛期の喜びを味合わずに苦難の時代を歩んできたが、少しでも良い状態にして次の代へとつなげていきたい。
- こうした今後への思いを口々に聞いた。

《第2部 終》

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

平成28年(2016)2月

《調査・編集・発行》

公益財団法人京都産業21北部支援センター
〒627-0004

京都府京丹後市峰山町荒山225

丹後・知恵のものづくりパーク内

TEL: 0772-69-3675 FAX: 0772-69-3880

E-mail: hokubu@ki21.jp

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝